

令和7年度 富山大学大学院
生命融合科学教育部 F D 研修会報告書

令和7年11月6日（木）



大学院生命融合科学教育部

目 次

巻頭言

1. 実施要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 参加者名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
3. 講演内容抜粋・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
4. パネルディスカッション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

生命融合科学教育部 令和7年度 FD 報告書 巻頭言

OECD の国際比較調査によると、日本の博士課程進学率は主要国で最低水準となっています。その背景には、学費や生活費などの経済的負担、アカデミアポストの減少、企業での博士人材の低評価によるキャリアパスの不透明さがあります。これらの博士号取得後の活躍イメージの乏しさや情報不足、固定観念が博士後期課程への進学意欲を低下させています。

欧米では「国家競争力に直結する分野は博士レベルの研究者なしには成立しない」という考えのもと、博士課程学生への経済的支援や多様なキャリアの確保が進められています。博士号は企業や研究機関でのキャリアにつながる“パスポート”として広く認識されています。このため欧米の産業界における博士人材の割合は、日本と比べてかなり高い水準となっています。一方日本では、博士人材の産業界での活躍は限定的です。この状況を踏まえ、日本政府は産業活性化を目的に、博士課程学生への経済的支援とキャリアパスの拡充を柱とした対策を進めています。

今年度の生命融合科学教育部 FD では、「博士後期課程への招待－博士号取得者の社会における役割－」をテーマに、博士後期課程への進学や博士号取得後のキャリア（アカデミア・民間企業）に関心のある学生を対象として、本教育部で博士号を取得した3名の講師をお招きし、オンラインでご講演いただきました。本学医学部の松本准教授（認知・情動脳科学専攻 修了）からは、アカデミアにおけるキャリアパスについて、医学生物学研究所の松澤博士（生体情報システム科学専攻 修了）と金剛化学の中川博士（先端ナノ・バイオ科学専攻 修了）からは、民間企業におけるキャリアパスについて紹介がありました。講演では、①博士号が昇進や専門職への道にどれほど有利か、②博士号によって得られる専門性や信頼性、③博士号を持つ人材が求められる業界や職種の具体例、などについて解説いただきました。また、医薬理工学環長の田端先生から「次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）」による、博士後期課程学生への生活費相当の給付と研究費支援について紹介いただきました。講演後学生からは、（a）どのような経緯でアカデミアと民間を選択したのか？（b）博士課程で身につけたスキルは企業でどのように評価されるか？（c）専門分野以外のキャリアへの転換は可能か？（d）研究職以外で博士号を活かせる職種は？（e）企業での待遇・採用・昇進に有利か？など、多様な質問が寄せられました。これらの質問に対し、講師からは博士号取得後のキャリアパスを構築する際に考慮すべき点について、貴重な指針を示していただきました。

本 FD には約 50 名を超える教職員・学生が参加し、活発な質疑応答を通じて博士課程学生のキャリアパスに関する多くの示唆を得ることができ、有意義な機会となりました。講演いただいた講師の先生方、ご協力いただいた URA の加藤様、そしてご出席いただいた教員の皆さま並びに学生諸君に、心より感謝申し上げます。

令和7年12月

大学院生命融合科学教育部長 黒澤 信幸

1. 実施要項

令和7年度生命融合科学教育部F D研修会実施要項

日時：令和7年11月6日（木）16時00分～

会場：オンライン開催（MS teams）

テーマ：「博士後期課程への招待 ―博士号取得者の社会における役割―」

- 1) 開会挨拶（黒澤教育部長）
- 2) SPRING 事業について（田端医薬理工学環長）
- 3) 生命融合科学教育部修了生による講演（各20分）

i. 松本 惇平（認知・情動脳科学専攻 修了）

富山大学学術研究部医学系 准教授

「動物を用いた情動・社会行動の神経基盤の研究と研究手法の開発」

ii. 松澤 峻（生体情報システム科学専攻 修了）

（株）医学生物学研究所（MBL）グループリーダー

「診断薬企業での博士のキャリア」

iii. 中川 裕介（先端ナノ・バイオ科学専攻 修了）

金剛化学（株）研究部

「企業における研究開発」

4) 学生・講師・教員によるパネルディスカッション（司会：加藤 URA）

5) 閉会挨拶（黒澤教育部長）

企画趣旨

生命融合科学教育部は発展的解消となるが、医薬理工学環へとその趣旨は引き継がれる。今回のFDでは、生命融合科学教育部の各専攻から1名ずつ修了生を招いて、現在の研究・仕事内容を解説してもらい、社会における博士号取得者の活躍や期待される役割、メリットなどについて、我々教員および学生に対して提言・アドバイスをいただくことを目的とした。



2. 参加者名簿

個人情報により省略

3. 講演内容抜粋

学内資料により省略

4. パネルディスカッション

1) 社会人 Dr. のメリット、デメリットは？

メリットとしては

- ・早めに就職して、仕事をしながら取れる（金銭的な会社のサポートがある）。
- ・会社の中での選抜があり、キャリアとして評価される。
- ・かなりの経験を短期間で積める。
- ・業務直結の課題が多いので、即座に仕事に活かせる。

デメリットとしては

- ・時間的、空間的に制約がある（忙しく、また、通える大学は限られる）。
- ・機会は少なく、社会人 Dr. を前提とした将来設計はできない。

2) 博士課程はキャリアアップのチャンスにつながっているか？

- ・会社内でチャンスは平等には与えられずに選抜があり、その選抜の一つの目安として博士号がある。（ただし、選抜以降は個人の頑張り次第）。

3) 研究者として生き残る上で重要な戦略とは？

- ・異なる分野の研究者との共同研究・役割分担が大事。

4) ジャーナルのインパクトファクターは就職にどのくらい影響するのか？

- ・研究所などのポストドクター採用に関しては、そんなに関係はない。
- ・企業の就職においては、ほとんど関係ない。
- ・博士課程での研究の進め方の方が大事。

5) 社会人 Dr. ではなく、博士課程に進むと決断したきっかけは？

- ・社会人 Dr. は考えていなかった。研究が楽しく博士課程に進学した。
- ・SPRING 事業の存在が大きい。

社会人 Dr. を決断したのは

- ・博士号の必要性を感じた。特に海外の人とかと仕事をする場合。研究開発以外でも博士号はいろんな状況で使える。
- ・チャンスがあった。会社的にも個人的にもタイミングが大事。

6) 博士課程に進学して専門性が高まることは、企業就職にデメリットかメリットか

- ・アカデミアの研究と企業の研究は方向性が違うし、企業の研究にぴったりはまる人材はアカデミアにはいないので、専門性の高さ（詳細）は問題にならない。
- ・採用面接においては、専門の大きなくくりは見るが、ものすごく細かいところまでは見ない。むしろ、論理的思考能力とか、質疑に対する応答の方が重要。

7) 研究で忙しい博士課程における、社会とのつながりやプライベート時間のマネジメントに関するアドバイスを。

- 研究室内でいろいろな企画があり留学生や社会人も多いので、研究以外の情報に触れる機会は多く、それほど不安はなかった。医薬理工学環でも同じだろう。
- 研究（実験）の ON と OFF でメリハリをつける（切り分ける）と良い。
- 研究を楽しくやっていたら、それほど不安に思う必要はない。行き詰まった時は手を休めてリフレッシュすると良いアイデアが浮かぶ。